（2012 年度山西大学奨学生レポート）

留学を終えて

加藤佳奈子

【はじめに】

今年７月に留学を終えて中国でのことをいろいろ思い出していますが、あっと言う間の１年弱でもうすでに当時が遠い存在に感じられ、中国にいたことがなんだか夢だったんじゃないかというような気持ちになります。このレポートが最後の報告、というのも不思議に感じますが、留学生活で感じたことや留学先である太原の印象などをここに総括として書いていきたいと思います。

【中国への留学でやりたかったこと】

山西大学での留学で一番やりたかったことは今まで中途半端にしていた中国語の習得でした。言語は勉強すればするほど終わりのないものだと感じますが、留学の区切りとして今年６月、中国語の検定試験に合格できたのは嬉しい気持ちになると同時に結果を出せたということでほっとしました。ただ、なぜ中国語を勉強するのかという一番のモチベーションは語学習得そのものよりも、中国という国をさらに理解し、自分なりの中国像を持ちたいというところから生まれていたように感じます。日本で見聞きする「中国」は事件性の高いものばかりが強調されていたため、極端な管理体制を持つ時代錯誤の国のように感じていました。けれど旅行で中国を訪れたとき、初めてありのままの世界を自分の目で見ることになり、そこではさまざまな環境のもと、それぞれの場所でたくましく生きていく人々の姿が印象的でした。この中国旅行での体験をきっかけにして中国語の勉強を始めたのですが、今回の留学は学びの最後のチャンスを与えてもらえたような気がします。留学前は私自身中国の何をどう学びとるか具体的にイメージすることができなかったので、現地での生活をとおして、メディアから受ける中国の印象と自分の目で見た中国の溝を埋め、整合性の取れた中国像を描ければと思っていました。

【留学当初のこと】

太原の武宿空港に初めて降り立った日のことを今でもよく覚えています。初っ端からトラブル続きで、まず太原行きの飛行機が搭乗１時間前に突如キャンセルになり、つたない中国語で新たな座席の予約をしなければならず、到着時刻の変更を山西大学へ伝えようにも携帯電話も公衆電話もない、という状態でした。なんとか問題が解決して武宿空港へ到着したのは夜９時過ぎで、迎えに

来てくれていた山西大学の職員の方を見つけたときにはずいぶん安心した思い出があります。大学に向かう車の中から真っ黒な野原と高架線沿いの照明灯、そしてまばらに並んだ商店などがみえ、初めて来た街のよそよそしさを感じながら、ここがいつか自分の街と言えるようになるのかとぼんやり考えていました。

その後、留学生活が始まってそう時間もたたないうちに反日暴動が起こり始め、このような事態はそれこそ予見できないものですが、それでも日本人留学生へ外出禁止令が出されるなど厳戒態勢のしかれた校舎の中で、間の悪いときに学生生活が始まったなと思いました。自ら望んでやって来た中国ですが、日本へ帰りたいという気持ちがほんの少しだけわいたこともありました。当時は自分で感じていた以上に閉塞感のある時期だったと思います。

この反日暴動への現地の友人知人たちの反応はさまざまで、慰めてくれる人、無視しろと言う人、持論を展開する人、日本人はこの問題をどう捉えているのか質問してくる人など、思った以上に意見が割れていました。よくよく話を聞いてみると、これは人々のメディアへの向き合い方の違いからきているようで、つまり人々はメディアからの情報に対し、自分自身の意見をかなりしっかりもっているなと感じました。日本にいたときの私にとって、メディアはただ受け入れるものだという意識だったのですが、中国人にとっては、メディアは聞いて、咀嚼して、自分なりの解釈を持つものだったようです。日本人にももちろんメディアリテラシーはありますが、中国人のリテラシーは日本より数段クリティカルな気がします。この傾向は高等教育を受けている人だけではなく社会全体の風潮らしく、みんなが情報への向き合い方に一家言あるようでかなり衝撃的でした。

暴動が落ち着いたあとも、春先まで反日のステッカーなどをみかけることはありましたが、それでも太原での生活自体には早々に慣れ、現地の人々と積極的に交流をもっていくなかでさらにさまざまな考えや生き方をのぞき見ることになりました。日本で生活している限り知り合う人の種類というのはどうしても限られてきますが、海外にいるときには外国人というどの社会階層にも属さない立場上、いろいろな人と接する機会があります。たとえば子供、学生、高齢者、経営者、役人、商店街で働く人々、電車で隣り合わせた乗客、レストランで相席をした人などです。私が外国人でなければ、また反日暴動が起きていなければおそらく彼らのパーソナルな話を聞けなかったかもしれない、という場面が何度もありました。現地の人々との会話はとても刺激的で、私にはない価値観、また問題意識などを聞くことができました。時には不快にさせられたり、相手に不快な思いをさせてしまったこともありますが、彼らの考えに触れられたのが、この留学の一番の収穫だと思っています。

【太原という街のこと】

留学先である山西省太原市なのですが、黄土高原とよばれる中国中央部の乾燥地帯に位置する地方都市です。太原の中心部には交通の要である鉄道の駅や歴史的建造物、政府機関などが点在していて、旧市街の雰囲気がまだ少し残っています。街はその旧市街を中心として南北に伸び、地図上で見ると長方形をしています。市の南には空港、そして工業地帯がひろがっていて、山西大学も比較的南に位置しています。太原の北を訪れる機会はほとんどなかったのですが、個人的な印象としては北へは行けば行くほど上り勾配となり、小さな建物が増えていくような気がしました。太原は平野につくられた街ですが北側を山に囲まれているようなかっこうなので、街のなかから街の端にある山々を眺めることができます。山の緑が見えるだけで街の雑踏の中でも風景が豊かに見えるから不思議です。

山西省の名産についてですが、石炭が全国的に有名です。石炭は一般的に工場などで燃料として使われているのですが、少し前までは家庭での煮炊きや暖をとるためにも利用されていたとのことで、当時の大気汚染は相当ひどかったと聞きます。今は北京の空よりもずっと青い空が広がる太原なので、過去の大気汚染なんて想像もつきません。この石炭のおかけで太原は経済的に豊かな街で、それが顕著に現れているのは道を走る車です。ラッシュアワーには日本車を含む外国産の高級車が交通渋滞をつくるのをよく見かけました。冬に山西省の南、運城市を旅行したとき、素朴な街の中には太原で見かけるような外国車は数える程度で、そのとき初めて太原は他の街とは違うのかもしれないと感じました。また毎月の提出レポートにも書いていましたが、去年から今年にかけて日本で見かけるような海外の大型店舗やブランドが相次いで太原に出店を始めています。私の地元、埼玉県川越市にあるお店が太原にもあり、なんだか地元川越で買い物をしているような錯覚を覚えたくらいです。街の発展には目を見張るものがあり、バブルがいつはじけるかという中国経済を危惧する記事を目にしても、まだ街には活気があり、よりよい生活を求める力が強く働いているなというのが現地で暮らしていたときの実感です。

経済だけでなく、よく心配される医療についても状況はずいぶん改善されていると思います。留学中に日本で治療した歯が急に痛くなり太原で治療を受けたのですが、衛生面も対応も日本と変わらずその後の経過もなんの問題もありませんでした。（ちなみに根管治療といわれる治療を受けました。以前抜いた歯の神経の一部がまだ歯の中に取り残されており、そこが化膿していたようです。病院へは４回通い、費用は全額で日本円に換算すると１万５千円くらいでした。日本で同様の治療を受けても保険適用で同じくらいかちょっと安いくら

いだと思います。）以前の留学生は北京まで行き日本人の医者にみてもらったと聞きましたが、今はそのようなことをする必要はないと思います。もちろん病院のランクもあり、事前に調べたり、周りの中国人に聞いてみたりすることは必要ですが。

病気や怪我については私自身この留学で病院にかかるようなことはなかったので一概には言えませんが、一般の治療は大学周辺の病院で受けられるようです。

太原は上海や北京のような大都市とくらべれば知名度なども今ひとつですが、それでも大都市にも負けないものがあると住んでみて感じました。最大の魅力は、街が発展を遂げつつも、時間の流れがゆったりしているところです。それは太原の人も実感しているようで、よく「北京や上海の生活リズムは速すぎる」と言っていました。この時間の流れは太原特有のものなのか、それとも地方都市全体としてそういう傾向があるのかはわかりませんが、ぜひこれからもこの魅力はずっと持ち続けてほしいと思います。

【中国の見えてこない部分】

太原の生活は快適でしたが、ただ、それが中国のすべてだということではありません。実は国を支えている一番厚い層には最後まで踏み込むことができませんでした。厚い層というのは都市部から離れた地域に住む人々です。長距離バスや鉄道の車の外に広がる田畑、またその中に点在する家々を見るたびに、普段目にすることのない中国が垣間見え、農村の生活がどんなものかを窓越しに想像していました。農村地帯出身者の話を聞くと、衛生、経済、医療、教育などの多くの面で都市部に水準がまだ追いついていません。生まれた場所で、ここまで人生が左右されてしまうのかというのを彼らを見ると感じます。そして自分がいかに恵まれた環境で育ってきたかを思い知らされます。

結局留学中、実際には田舎を訪れることは少なく、彼らの生活に入っていく機会は最後まで持つことができませんでした。田舎の生活の不便さ、大変さを聞くといつもしり込みしてしまい、いつか行こういつか行こうと日程を先延ばしにしていたら、情けないことに帰国の日が来てしまいました。それは留学を終えても心残りになっています。

ただ、話はそこで終わりません。実は日本に帰国後中国映画をいくつかみる機会があり、そこで偶然山西省を舞台に多数の映画を撮っている中国人監督を知りました。この監督は世界的に評価の高い贾樟柯監督その人なのですが、監督は山西省汾阳に生まれ、工場で働いていたり、小さな商店を経営したり、農作業で生計を立てたりしているような人々のなかで成長したそうで、その幼いころの原体験をもとに故郷の生活を撮り続けているとインタビューで話してい

ます。この監督の作品には、私の踏み込むことのできなかった田舎、また農村地帯の生活がドキュメンタリーのようなリアリティを持ちながらも詩的に描かれています。映画の中の人々は権力を持つことのない無力で弱い存在として登場するのですが、人々を取り巻く環境は今でもあまり変わっていないのだろうと、映画と自分の中の田舎の印象をつき合わせて思いました。

中国という国は今一番勢いのある国のひとつですし、これからも国際社会への影響は大きくなる一方だと思いますが、この国の発展のみに焦点をあてると見えなくなってしまう、映画の中で描かれたような人々がまだ多くいることを忘れてはいけないというのが個人的な思いです。残念ながら中国ではまだこの監督の作品は上映禁止なのですが、海外からでも、映画をとおして彼らに少しずつ光があたるようになってきたことは大きな意味があると感じています。（ちなみに贾樟柯監督の最新作が今年カンヌ映画祭で脚本賞を受賞したため、この秋に初めて国内上映が許可されるらしいです。）

【おわりに】

この留学を終えて、自分なりの中国像が結べたかを今考えています。中国では５千年といわれるほどの悠久の歴史とは裏腹に、政治体制は常にめまぐるしく変わりラディカルな変革を何度も行ってきました。また強大な国であるにもかかわらず、国内には民族問題や経済格差、環境問題などに代表される多くの問題が依然解決の糸口の見えぬまま宙に浮いています。私は中国が好きですが、政府が国民に強いる犠牲は時に理不尽にも映ります。あまりに多面的で語られないことが多いため、１年の留学くらいでは到底中国という国の全体像は見えてこないのかもしれません。そのため、冒頭での問いである「中国が理解できたか」という問いへの答えはおそらくノーです。けれど、「自分なりの中国像を持てたか」といえばその答えは、実はイエスだと感じています。

今回の留学に出た学生各々に自分なりの中国像があるとは思うのですが、私のなかの中国は、多くのものを背負いながらそれでもどこまでも大きく、すべてを包み込むような、まさに母なる大地のような存在でした。私はここでたくさんのことを考え、学びました。得たものは大きく、中国は私の成長に本当に不可欠な存在だったと感じています。

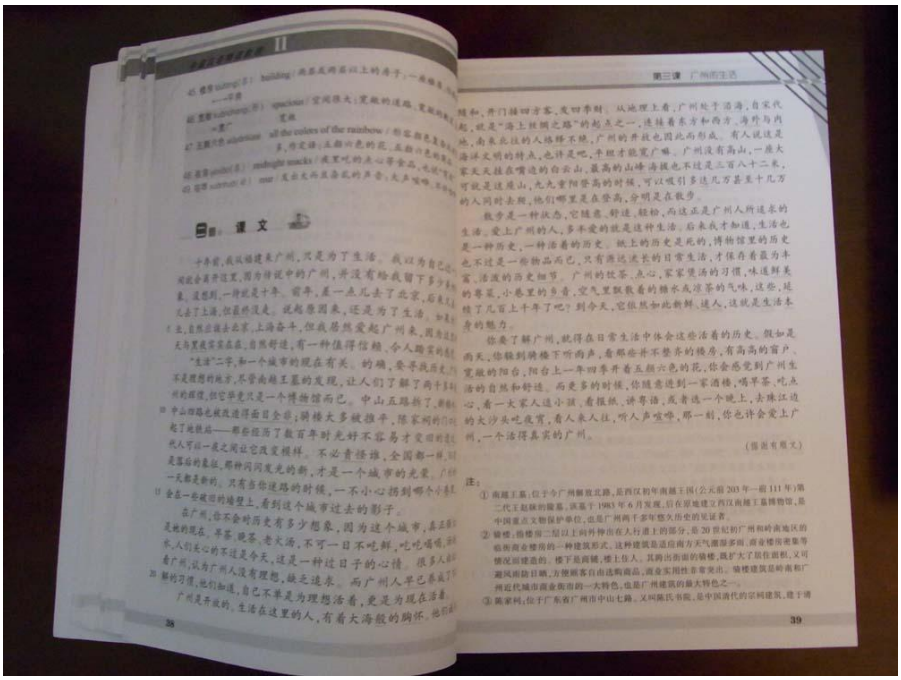
インド在住の友人が以前ブログでこんなことを書いていたことがあります。

「来世、インドのスラム街に生まれてきてもそれを受け入れられる」と思ったときに、これからの人生をインドで過ごそうという踏ん切りがついた、と。そのブログを読んだとき、いったいどういうことなのだろうと思ったのですが、留学を終えた今はわかるような気がします。友人はどんな生まれ方をしても、自分がその社会にいることが当たり前だと思えるようになったんだと思います。

数年前まで中国語を勉強するなんて、まして中国に住むなんて考えたこともなかったのですが、今は少し、中国で暮らせたら素敵だなと感じます。事実太原には馴染みすぎて一生暮らせといわれたら、おそらく暮らせてしまえるのではないかなと思います。それぐらい居心地のよい場所でした。

「来世、中国の農村地帯に生まれてきてもそれを受け入れられる」、そんなふうに未来の自分が話している可能性が、もしかしたらあるのかもと考えてしまいます。

最後になりましたが、中国、そして中国の人々には本当にお世話になりました。また、今回留学の機会を与えてくれた生まれ故郷の埼玉県、埼玉県庁職員の方々、特に留学生を直接サポートしてくださった県庁国際課の藤田さんには心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



留学中に使っていた教科書。
今見ると漢字量に圧倒されてしまいます。

大学を出たところになぜか積み上げられていた山西の特産、石炭。

公園で李白の詩を書く人。情緒があります。

中国の田舎はこんな感じです。
炭鉱へ出稼ぎにでる人も多いそうです。

こういう景色に出会うにつけ、壮大な国だと改めて思います。